る目に見えないほどの）マイクロチップがあらゆる商品に付随してわれわれの身辺にばらまかれ，それらが収集した情報が自動的に「どこか」に発信，収集される．そういうデバイスの侵入を防ぐことはできないし，気がつくこともない．現在でも，独居老人の家の魔法瓶が長時間使われないときには警報を発したり，子供や老人の現在位置を常時把握するシステムがあるが，要するにわれわれの身辺状況や行動が一種の監視下に常に置かれるようになるという．どんな本を買ったり読んだりしたかがデータベースとして蓄積され，個人の読書傾向がシステムに把握されると，今度はその傾向に合った新刊書や論文の案内が送られて来る．これは現在でもすでに利用可能なサービスで，大変便利だと言う．希望すれば同じ傾向を持つ見知らぬ他人を特定することも可能になるだろう．その代わりに，自分のあらゆる行動は，だれかに監視されていると思わなければならない．したがって個人情報の中でも，公知のものとすべきものと秘匿すべきもの（プライバシー）が，法的に厳密に区別される必要がある．こういうテクニックが最も利用されるのは，スパイとしての役割だからである．

このようなユビキタス社会に適応した人類の将来は，高度な利便性の対価として，個人差というものが次第に希薄になり，平均値と標準偏差で把握可能な社会になって行くような気がする．つまりロボットと人間の差がなくなって行くのではあるまいか．ロボットは肉体の限界を超えることができるから，ビッグブラザーがロボットだったという SF は現実味を帯びてくる．その時代まで生きる見込みがないのは，幸せかもしれない．

（金井弘夫）

□金井弘夫（著）・大場秀章（編）：**金井弘夫著作集　植物・探検・書評**　B 5 版．867 pp. 2008．￥14,284＋税．アボック社．ISBN: 978-900358-62-1.

東京大学や国立科学博物館に在籍され，現在も植物分類学の分野で活躍されている金井弘夫氏の著作集．ふつう研究者の著作集というとむずかしい論文集を想像するが，本書は著者の経験や考え方を記録した膨大な随筆集の様相を呈する．

本書は四部から構成され，第一部は「時代の記憶・探検の記憶」．旧制高校の自分史から始まり，1960～1970年代のインド，ネパールなどの海外における植物調査の旅の様子が非常に克明に記述されている．特に面白いのは「フィニッシュの話」．フィニッシュとはシェルパの間で，壊れる，無くなる，死ぬといった意味で，調査旅行のトラブル集とでも言うべきか．第二部は「植物の観かた・残しかた」．著者が開発したラミントンテープによるおしば標本の作成方法や標本棚の得失，旅行先での標本の作り方など，著者のアイデアマンぶりが窺える．第三部は「ナマエ・データ・ヒト」．『野草』に掲載された「ナマエを考える」は10回連載で終わる予定だったものが20回まで続いた力作．学名，地名，学術用語等のデータベースは著者が本領を発揮する分野．第四部は「書を残す」．主に『植物研究雑誌』に投稿された300以上の書評が収載されている．

このほかに著者年譜には著者の病歴まで記されているし，行動記録として1945年からこれまでに著者がどこを訪れたかが，経緯度，交通手段と共に記されている．この著作集で一貫してみられるのは，物事を記録することに関する著者のこだわりであり，分類学だけでなく人生における記録の大切さが再確認できる一冊である．

（近藤健児）

□林　将之：**紅葉ハンドブック**　B 6 版．80 pp．2008．￥1,200＋税．文一総合出版．ISBN: 978-4-8299-0187-8.

日本に生育する代表的な樹木約110種の紅葉した葉の写真を集めたハンドブック．秋の紅葉を楽しむ人は多いが，その植物の正確な名前はなかなか分からないもの．そのような疑問に答えるために，葉一枚から植物の名前が分かるように作られている．最初に赤色，橙色，黄色ごとにまとめられた葉の写真一覧があり，葉の色と形だけで植物名の見当がつく．その後に各植物の葉の大きさや色のバリエーションを示した記載がある．紅葉した葉の写真はきれいで見ているだけで楽しい．100 g 程度の小さなハンドブックなので，この本を持って落葉を探しながら山を散策するのも楽しそうだ．

（近藤健児）